

(8) ハインリッヒの法則の再考——間違った解釈の拡がり——
川崎医療福祉大学医療福祉学部子ども医療福祉学科 田口 豊郁

【要 旨】

災害防止のバイブルとして、Herbert William Heinrich 著「産業災害防止論 (Industrial accident prevention)」が多くの著作物やウェブサイト引用されている。その中でも特に、「ハインリッヒの法則」が数多く引用されている。しかし、その引用のされ方が不正確と思われるものが散在している。

本稿では、著作物・ウェブサイト等で不正確に引用されている内容と、ハインリッヒの原著の内容の差異を明らかにすることを目的とした。

不正確な引用の代表的な例として、①原著の図をそのまま引用せず、1:29:300の部分のみを引用している（この部分だけを引用すると、1:29:300は330種類の事故の重篤度の比率という誤解を与えかねない）。②原図の“no injury accident”を「ヒヤリ・ハット」している（“no injury accident (ケガのない事故)”は、事故が発生したがケガが無かったという意味であり、ヒヤリ・ハットは、「ヒヤッと、ハッと」としたが、事故にならなかった場合 (near miss) をいう)。——の2例が挙げられた。

一方、1:29:300の意味は、原著では、「同一の人間

に類似した accident が330 回起きるとき、そのうち300 回はケガを伴わず (no injury)、29 回には軽いケガ (minor injury)、1回には重いケガ (major injury) が伴う。そして、injury の有無・重軽にかかわらず、すべての accident の背景に、おそらく数千に達すると思われるだけの [不安全行動] と [不安全状態] が存在する。」と述べられている。330種類種類の事故の重篤度の比率ではない。

「ハインリッヒの法則」は、災害予防の古典ともいわれているが、基本的な考えは、現在の「リスクマネジメント」に十分通用し、学ぶべきものが多いことが確認できた。

また、間違った解釈・引用が拡がっていく一因として、以下のことが考えられる。間違った内容のものが論文・書籍として、あるいはインターネット上に公表されれば、不確かな情報であっても、誰でもネット上に情報発信ができるネットの時代では、コピーアンドペーストで、どんどん広がってしまうことになる。少なくとも、当たり前のことであるが、研究者・教育者は必ず原著を確認して人に伝えるべきである（孫引きはしない）。